

千葉県市原郡海上村の戦病死者

<写真 1> 旧海上村の慰霊施設



チュウレイトウ

この言葉の意味内容を知る人間が、いまの日本にどれほどいるだろう？

忠霊塔は天皇に忠義を尽くして死んだ者を顕彰するとされる。大本に靖国神社があり、都道府県には支社としての護国神社がある。忠霊塔はその市町村単位の支社として位置づけることが出来、そのことから「ムラのヤスクニ」とも呼ばれる。

その忠霊塔のひとつが千葉県市原市神代(かじろ)、市原市農業協同組合海上(うなかみ)支所の前にある。その昔、農協支所の建っている位置には、「千葉県市原郡海上村役場」があった。忠霊塔は町村役場の近くや、小学校校庭の一画に建立されていることが多い。

子どものころはここでよく遊んだ。中央の碑によじ登り、彫られた氏名をみながら、「この人はうちの親戚の人」とか「私と同じ名前の人がいる」などと言いながら。当時は砂利が敷き詰められていたが、いつのころか、コンクリートで固められた。誰が維持管理しているのかは調査していないが、誰が手向けるのか、花が添えられている。2003年夏、次男の協力を得て碑の内容を確認していたが、デジカメ画像を添えてその内容を紹介しようと思う。なお、花は造花であった。

忠魂碑

右側の碑、前面には「忠魂碑」とのみ彫られている。

裏面にまわると、日露戦争(1904~05)での戦死者7名の階級と氏名が彫られている。戦死者は、氏名は省くが、特務曹長1名、上等卒1名、一等卒3名、二等卒2名で、すべて陸軍歩兵とある。日露戦争の日本軍の戦死者約11万8千名、千葉県出身者2千73名のうちの7名だ。1889年の海上村の人口は2334名とあるので、1905年を2500名と推定すると戦死者は村人口の0.3%にあたる。

忠魂碑の揮毫者は、陸軍中将・梅澤道治。碑の建立は1915(大正4)年。

費用は寄付に負っていて、その氏名と金額が刻まれている。まとめると次のとおり。

<写真 2> 忠魂碑



従軍者 (61名)	116円50銭	
賛助員 (104名)	436円	
在郷軍人(55名)	49円50銭	
その他 (7名)	14円	<u>合計 616円</u>

従軍者も寄付をしている。50円を寄付した者1名を筆頭に、5円、3円、2円、1円と続き、最少額50銭が最多数で31名。61名に戦死者7名を加えると、海上村からは68が応召したことになる。賛助員は50円、25円、10円、7円からは1円刻みで1円まで。最多数は2円の53名。在郷軍人も名を連ねており、5円、3円、2円、1円、50銭で、最多数は50銭の31名。

東京・有楽町で「かけそば・盛りそば」が4銭の時代である(週刊朝日編『値段史年表～明治・大正・昭和～』1988年)。従軍者、在郷軍人に含まれているはずの小作農にとっては、大きな出費であったと思われる。

ちなみに、1918(大正7)年の警視庁巡查の初任給は18円、2005年度高卒採用巡查のそれは20万300円。単純計算で物価は約1万1千倍になっている。寄付総額を換算すると、約685万円となる。

忠霊塔

左側の碑、前面には「忠霊塔 元陸軍大将・鈴木孝雄書」とだけ彫られ、裏面には「昭和二八年建立」とだけある。

<写真 3> 忠霊塔



<写真 4> 記念碑



施設中央の記名碑の表面には、「自 満州事変 至 大東亜戦争」の戦病死者名が陸海軍の敗戦時の階級別に刻まれている。1931年にはじまる満州事変から、1937年の支那事変、1941年の大東亜戦争を経て1945年に無条件降伏をするまでの「15年戦争」あるいは「アジア太平洋戦争」の犠牲者である。一般に戦死者というけれど、戦闘による死ばかりでなく、拙劣な作戦による餓死・病死も多くみられるため、タイトルには戦病死者とした。整理すると次の表になる。裏面には碑建立費への寄付者の氏名が彫られている。

陸軍	大	中	少	大	中	少	大	中	少	准	曹			軍	伍	兵	上	一	二	計
	将	将	将	佐	佐	佐	尉	尉	尉	尉	長			曹	長	長	兵	兵	兵	
	人数				2		1	1	1	1	4			5	41	18	15	7	96	
海軍	大	中	少	大	中	少	大	中	少		兵	上	一	二		兵	上	一	二	計
	将	将	将	佐	佐	佐	尉	尉	尉		曹	長	兵	曹	兵	曹	長	兵	兵	
	人数								2		2	2	1	1		2	7	5	22	

戦闘隊 1, 空軍飛行長 1、軍属 7、合計 127名

少尉以上は「士官」と呼ばれる職業軍人である。陸軍士官学校・海軍兵学校を卒業することが条件である。少将以上の将官まで上り詰める人はほとんどが陸軍大学校・海軍大学校を卒業している。陸軍曹長・海軍兵曹長から陸軍伍長・海軍二等兵曹までは「下士官」と呼ばれ、「兵」からのたたき上げである。陸軍准尉はかつて特務曹長と言われ、戦時のみの階級で准士官と呼ばれる。陸軍兵長から二等兵・海軍兵長から二等兵は「兵」であるが、陸軍は召集されるのに対して、海軍は志願制であった。

兵役年限は満20歳から満40歳までであったが、満17歳から志願することができた。末期には19歳から45歳までに広げられ、17歳未満でも志願できるようになった。志願とはいえ、市町村や学校への割り当てがあり、強引な勧誘もあったということだ。

陸軍で下士官の死者が多いのは、それぞれの部隊の活動の中心をになっていたからであろうか。二等兵がゼロなのは、死亡により進級したからと思われる。

欄外の「戦闘隊」「空軍飛行長」については詳細は不明である。軍属とは軍人以外で本人の意思により職業として陸海軍に勤務する者をいう。

1945年の海上村の人口は3883名で、127名の死者は3.3%にあたる。

爾来60年、新たな戦死者は生まれては来なかった。しかしいま、新たな戦死者を生み出すための準備が進んでいる。

* 村の人口については、『市原のあゆみ』『市原市史・下』に依る。

(05.03.17脱稿)